

生きる、を支える科学技術



防災科学技術研究所における 広報活動とブランディングについて

防災科学技術研究所

令和2年9月10日

名称：国立研究開発法人 防災科学技術研究所

略称：防災科研・NIED
ポウサイカケン エヌアイイーディ

沿革：

昭和38（1963）年4月 国立防災科学技術センター設立
平成2（1990）年6月 防災科学技術研究所に名称変更
平成13（2001）年4月 独立行政法人化
平成27（2015）年4月 国立研究開発法人
防災科学技術研究所に名称変更

役員：理事長 林 春男
理事 安藤 慶明
監事 佐藤 威、神野 紀恵（非常勤）

職員数：400名（研究職182名、事務職218名）

令和2年9月1日時点

予算：76億円（運営費交付金）令和2年度 ※第2期SIP分を除く

所管：文部科学省



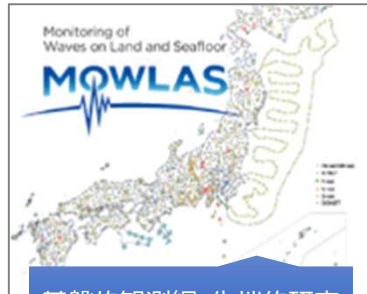
防災科学技術に関する研究開発成果の最大化



科学技術により、社会のそれぞれの構成員が高い防災力を持つ社会を実現すること。
 このため、研究者と社会が協働して課題解決にあたるコ・デザイン (Co-design) 、コ・プロダクション (Co-production) が可能になる研究体制を構築することが必要。



中核的機関としての
産学官連携の推進



基盤的観測網・先端的研究
施設の運用・共用促進



研究開発成果の普及・
知的財産の活用促進



研究開発の国際的な展開



人材育成



防災行政への貢献

防災科学技術に関する 基礎研究及び基盤的研究開発の推進

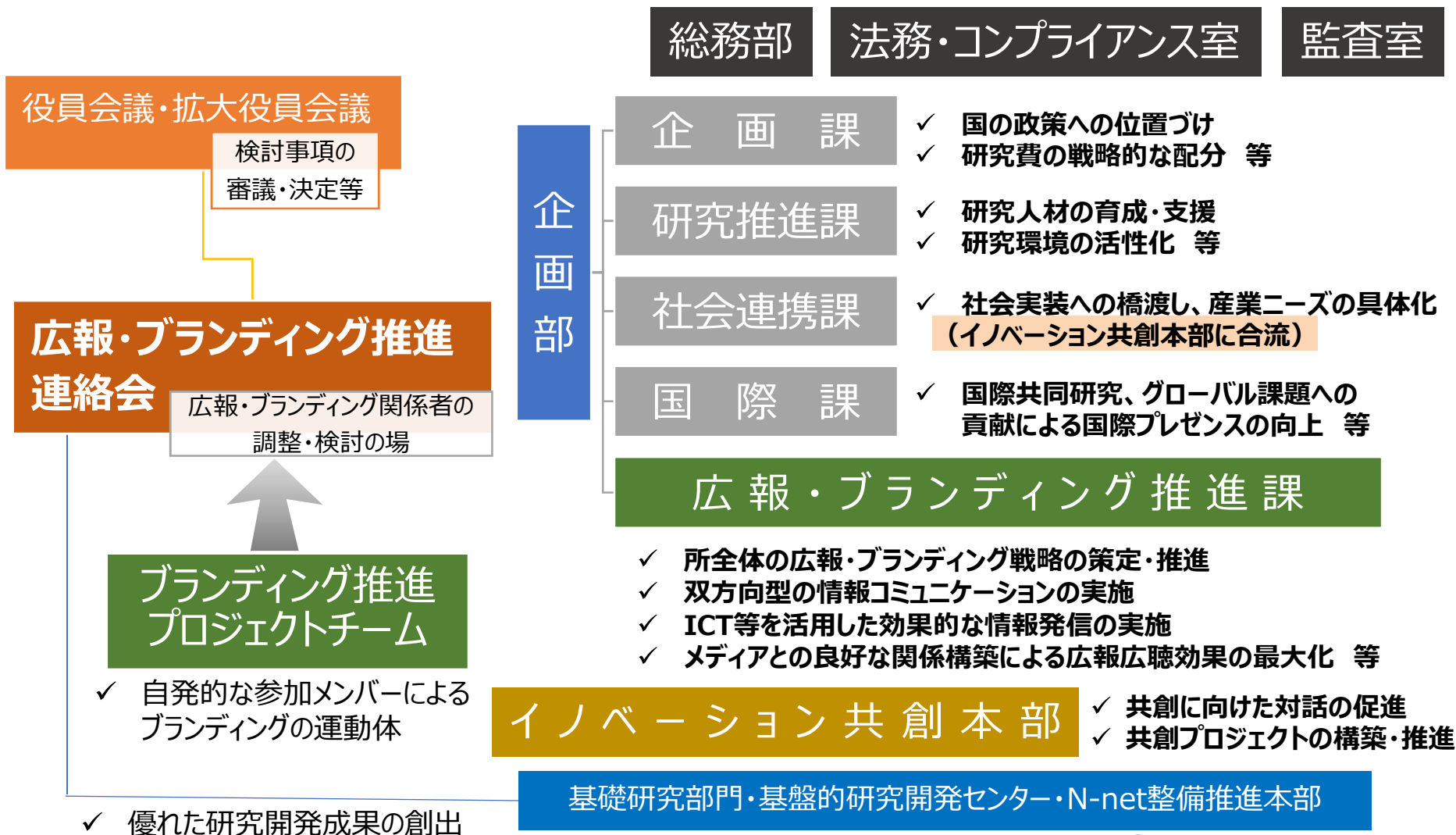
プロジェクトにおいて推進する研究開発

- 災害をリアルタイムで観測・予測するための研究開発
- 社会基盤の強靱性の向上を目指した研究開発
- 災害リスクの低減に向けた基盤的研究開発

柔軟かつ効率的なマネジメント体制の確立

- 研究組織及び事業の見直し
- 内部統制
- 業務の効率化 等

広報・ブランディング推進連絡会により、広報活動及びブランディング推進に関する研究部門と事務部門との情報共有、調整及び検討を実施。各種施策を積極的かつ円滑に推進



- | | |
|-------------|---|
| 1年目（平成30年度） | アイデンティティの策定（IDデザイン・理念構築） |
| 2年目（令和元年度） | ブランディングの推進（長期構想・統合レポート、
各分科会でのワークショップ） |

防災科研は、これまで「アイデンティティ」を策定・明確化し、ブランディングを実施してきたが、未だ防災科研の認知度（15.1%：令和2年3月アンケート）は低い。

特に、3年目となる令和2年度は、ブランディングの研究所内の業務・取組の橋渡しを進める広報・ブランディング推進課が発足し、新たに設立されたイノベーション共創本部とも連携しつつ、下記の課題に対応していく。

【課題1】 研究機関として、研究成果の発信及び研究のブランディングの推進が研究所の取組への理解の鍵。

【課題2】 防災科研の理念や研究方針にそった研究成果を創出を促すためには、研究者及び職員のブランディングへの理解が不可欠。

生きる、を支える科学技術

SCIENCE FOR RESILIENCE

地震、津波、噴火、暴風、豪雨、豪雪、洪水、地すべり。
自然の脅威はなくなるらない。

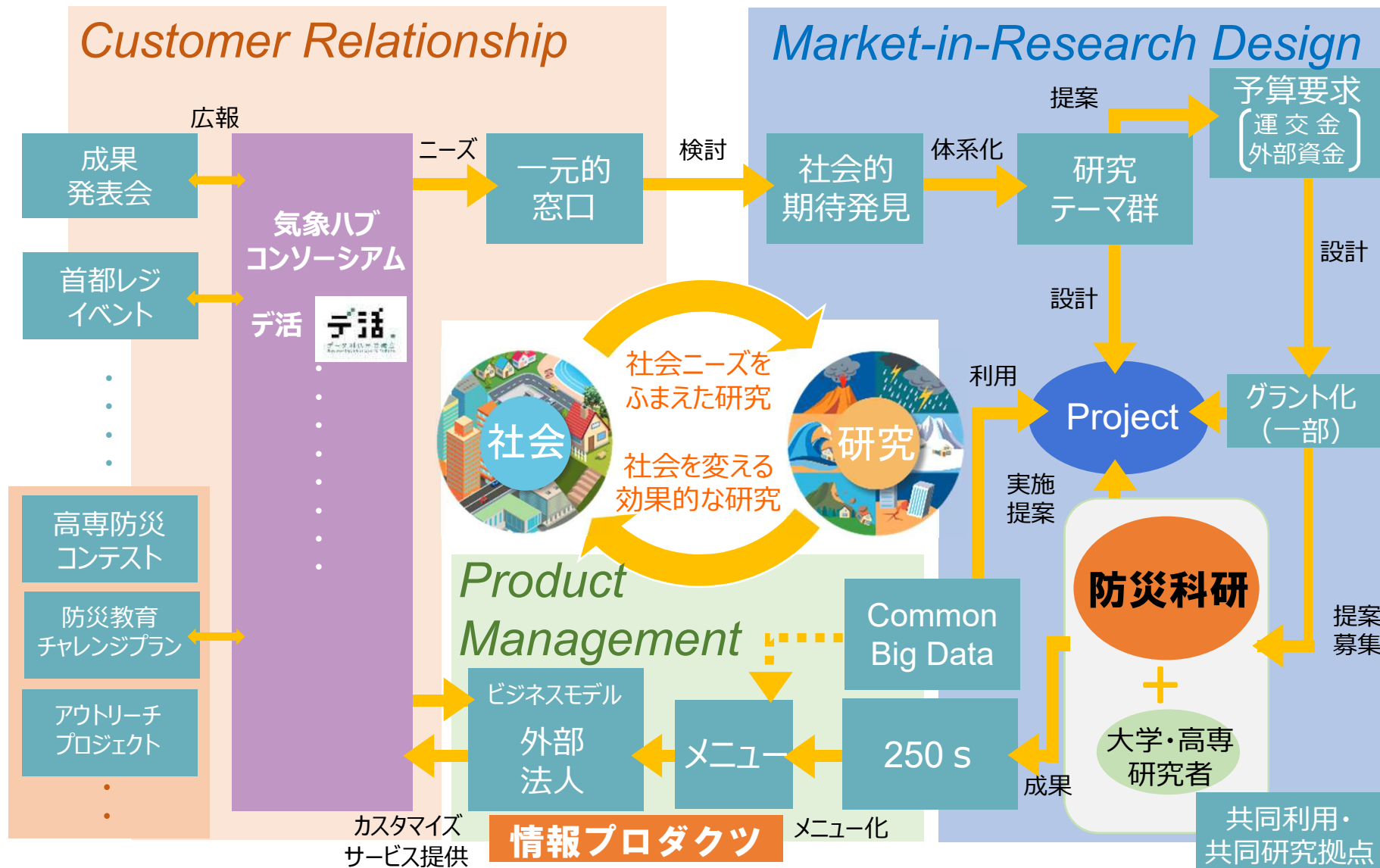
でも、災害はなくすことができると、
私たち防災科研は信じています。
この国を未来へ、持続可能な社会へと導くために。
防災科学技術を発展させることで
私たちは人々の命と暮らしを支えています。

さあ、一秒でも早い予測を。一分でも早い避難を。
一日でも早い回復を。



ロゴマークの意味

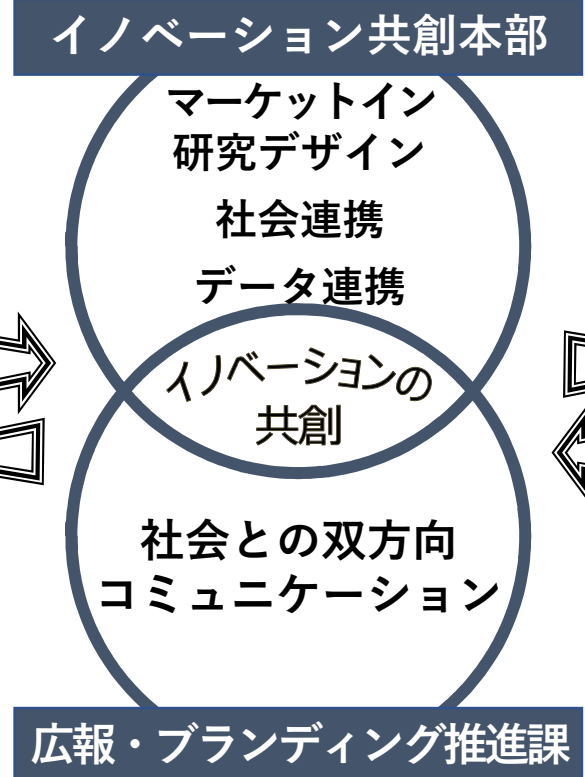
災害発生時のフェイズを青と赤の
2つのブロックで表しており、防災科研が災害全体を対象とする
研究開発を行う決意を示しています。
発生前の青色は、理知を結集して災害へ備える予測と予防を
象徴しています。
発生後の赤色は、情熱をもって災害に立ち向かう対応と回復
を象徴しています。
灰色は、信頼を生み出す基礎・基盤となる研究を示しています。
そして、左から右に駆け抜ける白色の「レジリエンスカーブ」は、
災害を力強くなやかに乗り越え、より良い未来につなげていく
力を示しています。



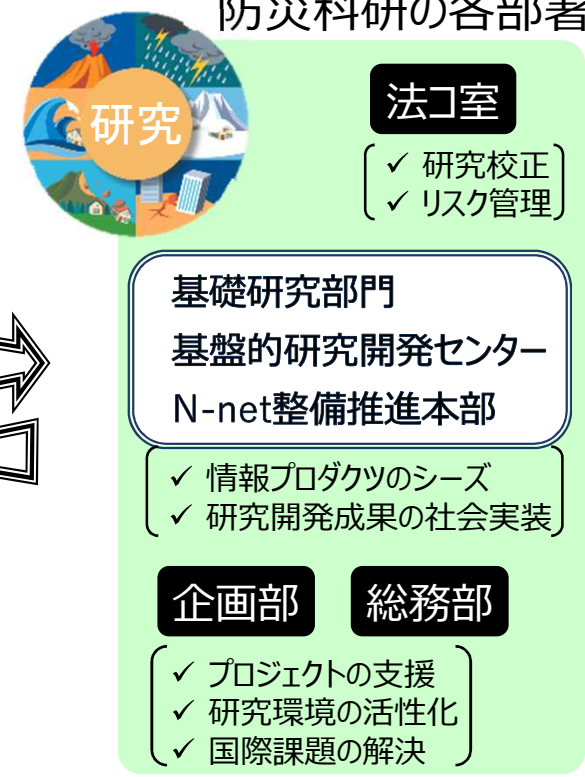
防災科研の研究のブランディングの推進

- 広報活動及びブランディング推進は、研究所全体で、職員一人ひとりが常に意識して取り組むもの。
- 優れた研究成果の創出と、ステークホルダーに響く発信と双方向コミュニケーションは、ブランディングに必須の言わば車の両輪。イノベーション共創本部と広報・ブランディング推進課が一体となってイノベーションの共創を進め、研究のブランディングに取り組む。

主なステークホルダー



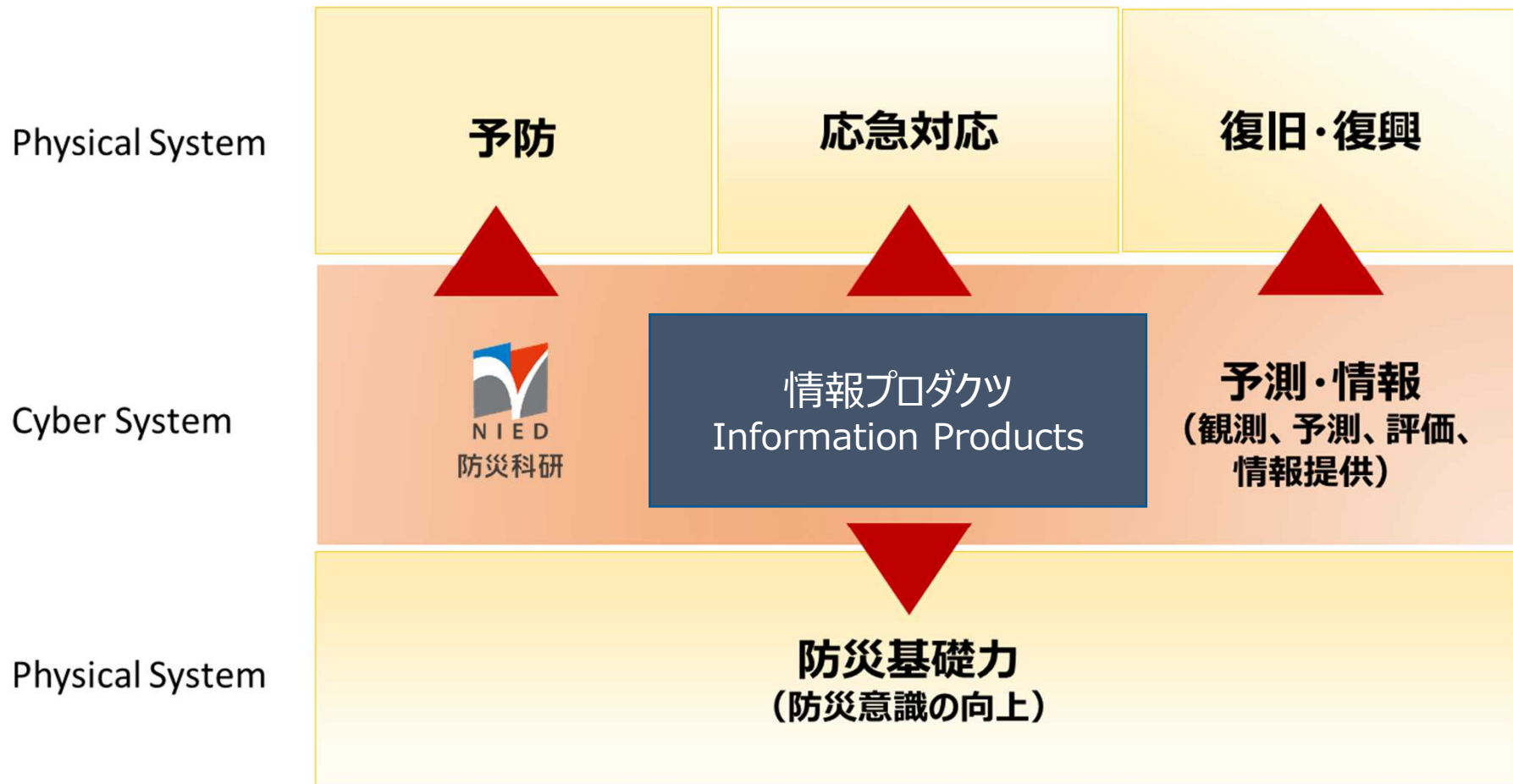
防災科研の各部署



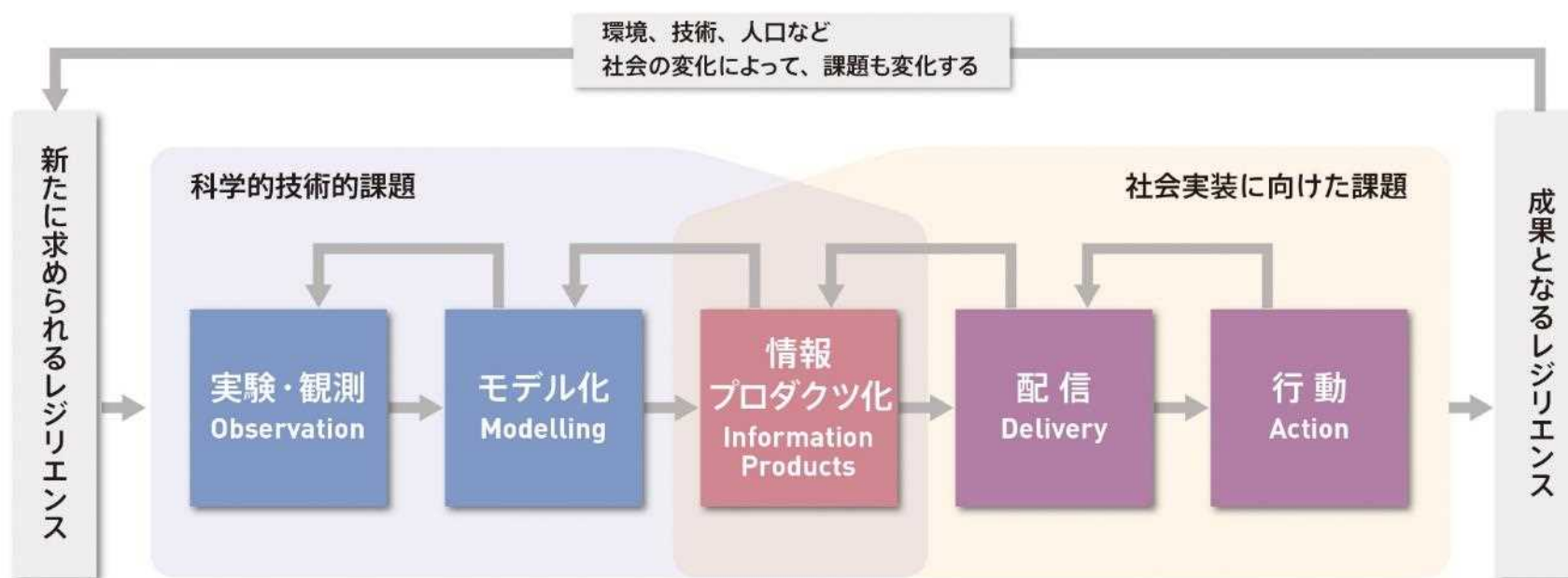
ブランディング推進プロジェクトチーム

自発的な参加メンバーによるブランディングの運動体

情報プロダクトをキーとした成果展開の取組 Cyber-Physical Systemの構築



科学と社会をつなぐ防災科学技術研究所の価値創造モデル



科学的技術的課題

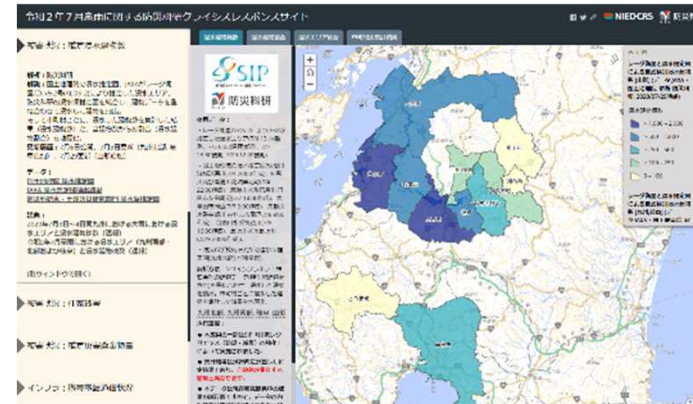
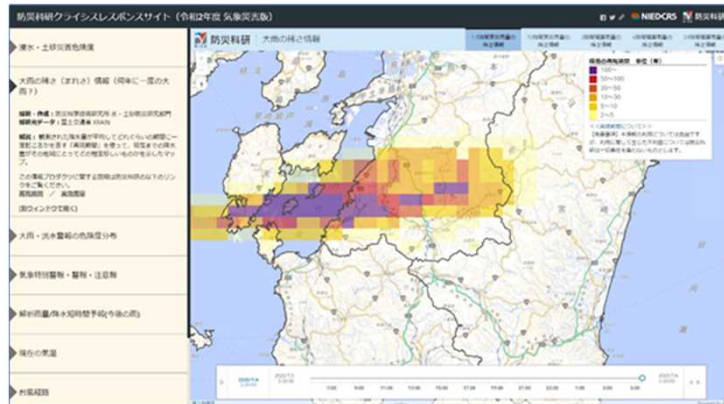
「オールハザード×オールフェーズ」で
総合的に研究。

社会実装に向けた課題

「行動」に結び付く判断材料となる
情報プロダクツの提供へ。

• 防災科研クライシスレスポンスサイト (NIED-CRS)

災害時の状況認識の統一を目的に、災害の概要、被害の状況、災害対応に役立つ情報など、それぞれの災害に関連した情報を集約し、目で見てわかる形で発信



一般への情報発信と、
 研究機関、民間企業
 (日本防災産業会議等)
 との連携

• 防災科研Twitterアカウント @C2010NIED



災害情報の発信



他の公的機関のリツイート

SIP4D（基盤的防災情報流通ネットワーク）による情報の統合



- ・ 災害現場に研究者を派遣
- ・ 研究成果で災害現場を支援し、災害現場のニーズを次の研究に活かす

➤ 防災科研の社会とのコミュニケーションをブランディングの理念の下に戦略的に実施。

◎ 目的

防災科研が社会からどのように見られているかを意識し、その上で、社会とどのように双方向のコミュニケーションを図るかについて、ブランディングの観点から、統一的な方針の下で実施する。

◎ 対応方針

ブランディングの理念に沿った「コーポレート・コミュニケーション」の導入。

➤ 研究者・職員へのインナーブランディングの実施及びインセンティブの創出。

◎ 目的

研究所職員が社会的な存在としての防災科研を意識しつつ、ブランディングを理解し、社会とのコミュニケーションを絶やさず、質の高い研究を通じて自ら進んでブランディングの理念の実現に取り組むことを促進する。

◎ 対応方針

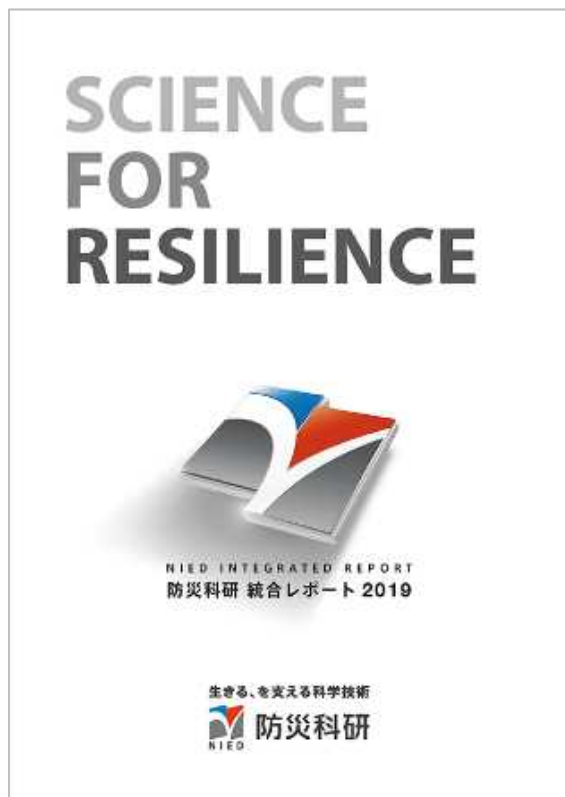
ブランディングの意義（研究活動への寄与等）の継続的確認・見える化。
ブランディングへの貢献に対するインセンティブの創出。「インナーブランディング」

- 1・社会に広く防災科研を認知させ、良好なイメージを醸成すること
- 2・防災科研への新規関心者層を開拓すること
- 3・社会ニーズに応えるコミュニケーションによる防災科研の存在感を向上させること
- 4・トップによるイメージアップを図ること
- 5・エンプロイー・リレーションズ（職員向け広報活動）を強化すること

「伝える」から「伝わる」コミュニケーションへの転換

→ステークホルダーとの**双方向性**のあるコミュニケーションの実現

財務情報と研究実績を見える化した統合報告書 (Integrated Report) の企画・制作



2020年2月13日
成果発表会で、概要版を配布

2020年7月17日
完成版を関係者に配布



i. 成果発表会

- 特別ゲストコメンテーターとして池上彰氏(ジャーナリスト、東工大特命教授)を迎え、理事長との対談や、投票形式のポスター発表などの**新たな取組を企画**した。
- 1,000名を超える参加者を集客。**(平成29年度から毎年、約2倍増)**
参加者からは「防災科研が社会に目を向けた勢いを感じる」、「目指しているものがはっきりわかった」等の好評を得た。



防災科学技術研究所理事長 林 春男 対談 特別ゲストコメンテーター 池上 彰



1年目

学校教育に関する
教育環境の充実、
防災リテラシーの
向上に貢献



2年目

ガールスカウト運動を通じ、
防災リテラシーを向上。
責任ある市民を育成



ii. アウトリーチ・プロジェクト

- 令和元年度から**特別支援学校に対する**アウトリーチPJを開始。
- 平成30年度のベルマーク教育助成財団に加え、ガールスカウト日本連盟と協定を締結し、全国での防災科研のプレゼンス向上、及び防災科研の研究者のプレゼン技術向上に関する取組を加速。
- 連携・協定団体を**複数に増やせた**ことで、**活動の持続性が強化**。

iii. Webサイト全面リニューアル

- 平時及び発災時にニーズの高い情報を**個別ユーザーの視点から探しやすくかつ分かりやすく伝える**ため、**Webサイトのフルリニューアル**に向けて情報整理とターゲットを見据えた設計を見直し。(令和2年4月13日リニューアル)



<Webサイトの全面リニューアル>



<記者会見の様子>

iv. メディア・報道機関との双方向コミュニケーション

- 一方的な発信だけでなく、新たな研究成果発表の際は、文科省記者会見室等を積極的に活用するなど、報道機関等に説明の機会を設け**報じられ易いよう工夫**。
- 公開実験の取材等で来所した各テレビ局に、**防災科学教室の情報を積極的に提供**することで、**複数の番組紹介につなげた**。

Dr.ナダレンジャーが自ら、身近なものを使って考案・制作した道具で、様々な自然災害の現象をわかりやすく楽しく解説する防災科学教室。年間約200校程度に出動し、科学実験を実施。

- 今般の新型コロナ禍の状況を踏まえ、家庭でも防災を学べるようDr.ナダレンジャーの防災科学教室（3つの動画）を作成・公開。（文部科学省マナビィ・メルマガでも紹介。）



Dr.ナダレンジャーの防災科学教室（動画）

防災科研が誇るDr.ナダレンジャーが小学校4年生以上を対象に災害の仕組みを科学的に実験して説明をします。

【液状化実験】

大地震のときに発生しやすい液状化現象について「エッキー」を使って実験します。

【地震の揺れ実験】

地震の揺れ方によって揺れやすい建物と揺れにくい建物があります。「ゆらゆら3兄弟」を使って実験します。

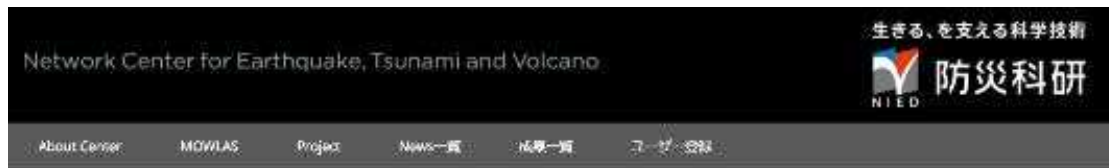
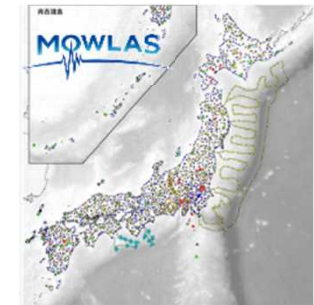
【なだれ実験】

本当は怖いなだれについて、「ナダレンジャー」を使って、楽しく実験します。

今後、ベルマーク教育助成財団やガールスカウト日本連盟等の全国組織と連携しつつ、Dr.ナダレンジャーをはじめとする防災科研の研究者と学校現場等とをオンラインでつなぎ、双方向のweb教室開催を目指す。

「MOWLAS」バーチャルブース

防災科研の地震津波火山ネットワークセンターが運用する
陸海統合地震津波火山観測網「MOWLAS」(モウラス)等を
紹介するバーチャルブースを設置



画像をクリックしてブースの中へお楽しみください!



https://www.mowlas.bosai.go.jp/nied_pr/

もしもあなたの街で地震が起こると・・・ デジタルコンテンツ「地震10秒診断」を公開 ※日本損害保険協会との共同リリース

- 防災科研は、地震の予測データとライフラインの支障日数シミュレーションデータ等を損保協会に提供。
- 損保協会は、利用者の位置情報を基に防災科研から提供されるデータから、関連数値を抽出し、「地震10秒診断」を公開。



首都圏の局地的な激しい気象の発生状況を いつでも、誰でもチェックできる システム「ソラチェック」を公開



- ① 降雨強度推定アルゴリズムによる「雨」
- ② 先端的解析技術による「風」
- ③ 防災科研独自の雷 3次元観測による「雷」
- ④ レーダー観測データから降ひょう域を推定した「ひょう」のリアルタイム情報をまとめて閲覧。

～雨の季節にあなたを守る～ 「災害リスクが一目でわかるマップ」の 試験公開と「身近な災害リポート」を募集



- 雨量と災害の起こりやすい場所の情報を重ね合わせることにより、洪水や土砂災害のリスクの高い場所を視覚的に表示する「リアルタイム洪水・土砂災害リスク情報マップβ版」を試験公開
- 試験公開の期間に広く一般の方々から道路冠水や浸水などの情報提供を募集
- 夏休み期間中、小学3～6年生親子を対象に「ふるりポ！」親子サポーターを任命終了後、表彰式も実施。



- 6月11日 朝日新聞
『ナダレンジャーと防災学ぼう つくば、納口博士の動画 地震や雪崩、再現実験』
- 6月2日 読売新聞
『災害時のコロナ対策 紹介 自治体の「知恵」集約 防災科研』
- 6月22日 NHK
『急なひょうや雷雨 リアルタイムで観測するシステム 防災科研』
- 6月29日 読売新聞
『浅間山 天明噴火の記憶 後世へ 防災科研 孀恋郷土資料館 = 群馬』
- 7月5日 読売新聞
熊本大雨「50～100年に1度」の雨量 防災科研が解析
- 7月24日 読売新聞
線状降水帯予測 避難に有効 九州豪雨 防災科研など精度向上目指す
- 7月27日 日本経済新聞
『防災科研、地震の揺れを高精度予測 AI 活用で』
- 8月3日 NHK
『夏休み天気報告 小学生の任命式（ふるりポ！）』
- 8月26日 毎日新聞
『論点・被災者への公的支援 無原則な拡大で不公平も 林春男 防災科学技術研究所理事長』

生きる、を支える科学技術

SCIENCE FOR RESILIENCE



防災科研